# 魔法先生ネギま！　　転生者VS転生者

夢の扉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法先生ネギま！　転生者ＶＳ転生者

【Ｎコード】
Ｎ６９２０Ｙ

【作者名】
夢の扉

【あらすじ】
気がついたら転生？悪魔から特典をもらい最強なチート能力を手に入れた主人公が３人の従者と供にネギまの世界を好き勝手して生きていく物語。この作品にはご都合主義、チートなどがふくまれておりますのでご注意を。

# 第一話　転生！？（前書き）

どうも夢の扉です。
前作を消してまた新しい作品を書き始めました。
いつまで続くかは分かりませんががんばります。

# 第一話　転生！？

気がつけば俺は真っ白な空間にいた。
「どこだよここは？
俺は確か部屋でゲームをやっていたはずなのに。」

「気がついたようだな」

どこからか声がした。

「だれだ！」

「すまない、驚かせてしまったかな？私は君をここに呼び出したものだよ。」

俺はパソコンなどでよく二次創作小説を読んでいたからピンときた、

「もしかしてあんたは神様なのか？俺はテンプレ転生ができるのか？」

「残念ながらそれは違う。私は神ではない、悪魔だ。そして君を呼んだのは君以外のほかの転生者を殺してもらうためだよ。」

「俺以外にも転生者がいるのか、でも何でころすんだ？」

「ああ、そのことなんだがな…、実は天使のやつらが娯楽のために他の転生者を次々に送り出したんだ。
早く対処しないとあの世界が転生者の世界になってしまうんだ。力を貸してくれないか？」

その話を聞いて俺は『天使と悪魔の立場逆だろ』なんて思っていた。

「ちなみに、断ったらどうなるんだ？」

「それなら心配はいらないよ、ここの空間での記憶をなくして元の場所に返すだけだからね。どうする？」

「しかたねーな、やってやる。その代わり１つお願いがある。」

「かなえれる限りならかなえるよ」

「元の世界での俺の存在をなかった事にしてほしい」

「いいのかい、君が生きたということまで消えてしまうのに。」

「かまわない、やってくれ。」

「分かったよ、すぐには出来ないだろうから徐々に消えていくようにしたよ。」

「ありがとう。それで俺は何の世界にいくんだ？」

「魔法先生ネギまの世界だよ。」

俺はその漫画を読んだことがない、二次小説も原作を知らないのは読まない主義だ。

「どんな世界なんだ？」

「タイトルから分かるとおり魔法使いの少年が学校で先生をやるってお話だよ。」

魔法か、使えるのなら使ってみたいが。

「それじゃあ君の特典を決めようか。特典の数３つまでだ」

「それじゃあ、俺が望めばどんなことでも出来る能力をください。副作用なんかはなしで。」

俺は二次小説をずっと読んできてなんでこのような能力を願わないのかずっと疑問に思ってきたことだった。

「ずいぶんすごいのを思いついたね。いいよ、１個目はそれで。その能力を使えば転生者なんて一瞬で皆殺しよく考えたね。」

俺はいくらなんでもこの能力はダメだろうと思っていた。

「自分で言っといてなんだが、いいのか？それを使えば一瞬で終わるぞ。」

「いいんだよ別に僕たちは君を使って楽しみたいわけじゃないからね。早く転生者を殺してくれればそれでいい。向こうの世界で君が何をしようと君の自由だ。」

マジかよ！最高じゃないか！むこうの世界にいった瞬間に転生者を殺してしまえば後は俺の自由だ！

そのことも考えて２つめの能力を考えないとな

「俺を不老にしてくれ。」

「あ、それなら転生する際に自動的になるから大丈夫。不死にはならないけどね。」

「それじゃあ不死にしてください。」

「いいのかい？死ねなくなるんだよ。」

「大丈夫だ、１個目の能力があるから死にたい時にすぐ死ねる。」

「了解」

３つ目は何にしようかな？やりたいことは１つ目の能力で何でも出来るし。

そうだ！従者だ！仲間を貰おう、一人じゃ寂しいからね。

「従者を３人ください。」

「いいよ。容姿とかはどうする？好きに決めれるけど。」

どうしようかな？好きなのは刀語の鑢七花とかＦＡＴＥの四次ランサー、ライダー、五次アーチャーなんだけど。

「鑢七花と安心院なじみと×××でお願いします。」

「分かったよ。おまけに従者も不老不死にしておいてあげたよ。」

「サンキュー。それじゃ、行くか。」

「準備はいいかい？この白い扉をくぐればいけるよ。」

「いろいろありがとう。じゃあな。」

「こちらこそ。」

こうして俺は魔法先生ネギまの世界へと旅立っていった。

## 第一話　転生！？（後書き）

3人目の従者どうしよ…思いつかん
このキャラがいい！という方がいらしたら感想までどうぞ。
そういえば主人公の名前が出てきてない……どうしよう。

## 第二話　私の名前は（前書き）

第二話です。
３人目の従者が判明します。なんと３人目はあの人だった！？

## 第二話　私の名前は

扉をくぐった俺を待っていたのは白い光だった。

「大丈夫、もうすぐネギまの世界に着く。向こうに行ったら君の従者が全てを教えてくれるさ。これでもう僕は君には会えなくなる。それじゃあ頑張ってね。」

「ああ、最後までありがとう。」

次の瞬間光が消えて俺の目の前には3人の人間がいた。

一人目　鑢七花

「あんたが俺たちを従者にしたのか？まぁとりあえずヨロシクな」

二人目　安心院なじみ

「へぇ、悪平等である僕を従者にするなんてよっぽど物好きなんだね君は。」

三人目　萩原子荻

「ここはどこですか？見たことのない場所ですが。」

そう、俺があの時選んだ三人目の従者は戯言シリーズに出てくる「策士」こと萩原子荻だったのだ。

選んだ理由は単純、戯言シリーズに出てくる女キャラで一番好きだ

ったからだ！
それに頭を使う人が一人はいたほうがいいと思ったからな。
すると、萩原子荻が話しかけてきた。

「そういえば、あなたは私たちのことを知っていますが、私たち3人はお互いのことをなにもしらないのです。」

「そういえばそうだね。それじゃあここらで自己紹介とでもいこうか。
僕の名前は安心院（あじむ）なじみだよ。僕のことは親しみをこめて安心院（あんしんいん）さんと呼びなさい。」

「俺は虚刀流七代目当主鑢七花だ。ところで俺は何をすればいいんだ？ただしその頃には、あんたは八つ裂きになっているだろうけどな。」

「私の名前は萩原子荻。私の前では悪魔だって全席指定、正々堂々手段を選ばず真っ向から不意討ってご覧に入れましょう。」

次は俺の番か。

「俺は仮初燈籠（かりそめとうろう）だ。転生者でこの世界にいる俺以外の転生者を殺すために能力をもらい君たち3人を従者として連れてきた悪魔の使者だ。よろしく頼むよ。」

とりあえずこんな感じだいいかな。能力については聞かれれば教えるつもりだし。

「ところであなたの能力は何ですか？」

「そうそう、僕も気になっていたんだよね。」

早速聞かれたか。
あ、そういえば転生者皆殺しにするのを忘れてた。
能力がちゃんと使えるかどうかも試してみようかな。

「ああ、俺の能力は俺が望めばどんなことでも出来る能力だ。後は不老不死だな。お前たちも不老不死だぞ。」

「へぇ〜、すげえな。無敵じゃねーか。」

「どんなことでも出来る能力ですか。試しに使ってみてもらえますか。」

「いいぜ。」

俺は心の中で俺以外の転生者がみんな死ぬことを願った。
すると俺の周りにいくつかの光の球が出てきて四方八方へと散らばった。

「……一応、転生者が死ぬことを願ったんだが。」

「どうやら光の球が転生者のほうに向かったようですね。おそらくあの光の球が転生者を殺すのでしょう。」

スゲー、超チートじゃんこれ。
てかもう転生者みんな殺しちゃったからやることないじゃん。どうしよう。

「それよりこれからどうするんだ？いつまでもこんなところにいる

わけにはいかないだろ。」

「そうだな。とりあえずここはいつの時代のどこなんだ？」

「えーと、今は西暦で言うと１３４５年だね。日本で言うと室町時代かな。」

「場所はアフリカ大陸の未開の地のようです。」

室町時代か。どうしようかな。

ん、未開の地？それならまだ人はこないってことだよな。

「よし、修行だ、修行をするぞ！」

「修行？そんなことをしないでも僕たちはすでに強いと思うけどね。」

「何を言っているんだなじみ。二次創作といえばまずは修行だろ！それにこの世界には魔法があるんだぞ！！」

俺はなじみの手を握りしめながら熱く語った。

「い、いきなり手を握らないでくれ／／／　その、それと、わ、私のことは安心院（あんしんいん）さんと呼びなさい。」

「なんでだよ、なじみっていい名前じゃないか。」

俺がそういうとなじみは顔をりんごのように赤くして「もう好きにしてくれ／／／」といった。

どうしたんだ？

「あなたはもう少し女心を理解したほうがいいと思います。」

「さすがに俺もそれはどうかと思うぜ。」

子荻と七花も呆れている。

なんでだ？

「そういや修行つってもどこでやるんだ？」

「それなら心配はいらん。ここから半径３００メートルの場所を隔離して現実の時間の２４０分の１にする。つまりここでの１日は現実での６分てことだ。そして現実の世界ではここは何もない土地に見えるようにする。これなら思う存分暴れられるぞ。」

俺が指を鳴らすと半径３００メートルの中に光が照らされる。光が収まるとそこには緑が広がり巨大な洋風の城が建っていた。

「おぉー！すっげーでかい城だなぁ！池まであるぜ。」

「能力を使ったのですか。それにしてもこの広さ、３００メートルを超えていませんか？」

「それも能力を使って広げた。現実の世界だと３００メートル先には人里があったからな。」

「それじゃあ早速明日から修行を始めるから今日はもう城に入って休憩しようぜ。」

「私は少しこの外を見ていきたいのでしばらくしてから戻ってきま

す。」

「わかった。七花はどうするってもういなくなってるし。なじみはどうする？城に入るか？っておーいなじみさーん？」

なじみは顔を赤くして下に向けたままで動かない。

「どうした、なじみ？　大丈夫か？」

動かない。

「しょーがねーな、城まで運んでいってやるか。」

俺はなじみを抱きかかえて城に戻った。

……所詮お姫様抱っこというヤツで。

帰った時になじみの顔が真っ赤に染まっていたのは言うまでもない。

## 第二話　私の名前は（後書き）

というわけで、３人目の従者は萩原子荻ちゃんです。
最初は哀川潤さんにしようかと迷っていたのですが、主人公反則チートなんだしこれ以上チートいらなくね？　と思ったんで戯言シリーズの中で一番好きな萩原子荻ちゃんにしました。
この作品のタイトルは転生者ＶＳ転生者ですがこれ以上転生者は出てこない予定です。（たぶん）

## 第三話　修行だ～！（前書き）

修行編です。

## 第三話　修行だ～！

修行1日目

「よし、早速修行を始めるぞ。」

「修行といっても何をやるんだ？」

「時間はたっぷりとあるんだ。基礎体力をつけるところからやっていくぞ。」

とりあえず中での５０年外での７６日と1時間の間ひたすら基礎体力作りとしてランニング、筋トレをやることにした。

ある日の1日

「それじゃ今日も1日がんばるか。」

「何で私までこんなことを。私は頭を使うほうが得意なのに。」

「まぁいいじゃないか。慣れれば意外と楽しいぞ。」

「そんなことを思っているのは七花君一人だけだと思うけどね。」

と、七花以外は嫌がっている様子だがみんなちゃんとやっているので体力はどんどん付いている。

子荻なんか最初は城の外周1周も出来なかったのに今では1日に5周もできるようになってきた。

（城の外周1周は３５キロ）

俺となじみも1日に１０周はできるようになってきた。

七花なんかはものすごい速さで1日に２０周もしている。

「終わったー。」

「よーし、みんな城に戻るぞ。」

修行が終わり城に戻ると夕飯の時間だ。
飯は全部電子機器に作らせているからメニューを考えるだけでいい。
食材は冷蔵庫に自動で補充されるからいつでも好きなものが食える。
たまに俺やなじみが作る時もあるけどな。
七花と子荻は料理が出来ないから論外。

「うっめー！いつ食ってもうめーな、この料理は。」

「私は燈籠の作る料理の方が好きですけどね。」

「俺もだ。」

「僕もだよ。」

「また今度気が向いたら作るよ。」

夕飯が終わったらみんなでゲームをやったりして遊んでいる。

「今日はみんなでマリモカートをやろうよ。」

だいたいトランプかなじみがどこからか持ってきたゲーム機を使って通信対戦をやっている。
今からやろうとしているマリモカートというのは色とりどりのマリモのキャラクターが出てくるレールゲームである。

「今日は負けないからな！」

この手のゲームをやるときはだいたい七花が負けるのである。

「それじゃあキャラクターを選んでスタートしようか。僕はこのオレンジ色のマリモにするよ。」

「私は青色にします。」

「俺は赤だな。」

「じゃあ、オレは黒だ。」

「みんなキャラクターを選んだね？それじゃあ始めるよ。」

『3，2，1，スタート！』

コースは雪のコースだ。

このゲームは拾ったアイテムで相手の邪魔をしてもいいのでオレとなじみと子荻は七花を集中攻撃する。

「何で毎回俺ばっかり狙うんだよぉ～。」

「フフフ、そのほうが面白いからね。なにっ、誰だい、今僕に甲羅を当てたのは。」

「油断大敵です。あっ、燈籠さんよくもやってくれましたね。」

「油断してるのはお前の方だぜ、子荻。」

『ピロピロリーン』

ん？何の音だ？

「うわあぁぁぁ！まさか七花のヤツ、ハリケーンをとったのか！？」

ハリケーンとは巨大な竜巻を発生させ自分以外に攻撃するアイテムである。

威力はゲームの中で１番強い。

「はっはっは～、どうだ参ったか！」

俺たちがハリケーンの被害にあっているうちに七花は一足先にゴールした。

「そんな、まさか七花さんに負ける日が来るとは思ってもいませんでした。」

そんな感じで１日は過ぎていく。

そんな感じでで５０年がたった。

「体力づくりも終わったことだしこれからは何をやるんだい？」

「ああ、これからは、個別トレーニングでもしようと思う。」

「というと？」

「自分のしたいことを好きに出来るということさ。オレは能力の使

い方とかの練習、七花なんかは虚刀流をつかっての修行なんかだな。
それは好きに決めてもらってもかまわない。」

「それでは私はどうしましょうか、特にやることがあるわけでもないし。」

「子荻ちゃん、それなら僕と一緒に修行をしないかい？君にしか使いこなせないようなスキルもあるからね。」

「んじゃ、俺は外で型の確認でもしてこようかな。」

これで全員やることは決まったか。
七花は虚刀流の型の確認。
なじみは異常と過負荷の確認と子荻の教育。
子荻は異常の才能の開花をなじみにやってもらう。

そしてオレは能力の使い方や確認。出来ることの幅を増やし実践にもちゃんと使えるようにまで制御できるようにする。

全員がそれぞれのことを終わらせたら次に行くか。

七花の修行風景
「虚刀流一の構え　『鈴蘭』　虚刀流　『菊』」
バキンッ
「虚刀流二の構え　『水仙』　虚刀流　『牡丹』　」
バキッ、ボキッ

「虚刀流　『百合』」

メシメシッ

「虚刀流・『石榴』から『菖蒲』まで、打撃技混成接続」

バキッ、ボキッ、メキメキッ

「続けて虚刀流一の奥義　『鏡花水月』」

ミシッミシミシ、ボキンッ！

「ふぅ、こんなところかな。まだまだ修行が必要だ。」

七花の周りにまっすぐと立っている木は1本もなかった。

なじみ・子荻の修行風景

「そういえばなじみさん、なじみさんって燈籠さんのことが好きなんですか？」

「ブッ！い、いきなり何を言い出すんだ君は。」

「もしかして図星だったりして。」

「そ、そんなわけないだろ／／」

「顔を赤くして否定されても信用できませんねぇ～。あ、そうだ。なじみさんが燈籠さんのことを好きじゃないなら私が落としちゃっ

てもいいんですよね。私こう見えて胸も結構ありますし、きっと私の魅力に燈籠さんはメロメロですね。」

「そ、それは本当なのか？」

「おや、不安になってきましたか？好きな人が私に取られてしまうことが。」

「ち、ちがう／／」

「いい加減認めたらどうですか？そのほうが楽ですよ。」

「僕は、燈籠のことが、その、……す、す、好きだ／／／」

「ようやく言いましたか。」

「それで子荻ちゃんはどう思ってるんだい？燈籠のこと。」

「好きですよ。異性として。」

「ずいぶんとあっさりというんだね。」

「もちろんです。隠しても何の意味もありません。しかし燈籠さんはどっちを選ぶんでしょうね。」

「さあね。でも燈籠の正確からして　どっちも好きだ　とか言いそうだけどね。」

「それはありえますね。」

とこのように修行には全く関係ない話をして盛り上がっている2人であった。

## 第三話　修行だ～！（後書き）

そういえば今テスト週間で金曜日にテストがあるんですよ。
全然勉強してない（涙）

## 第四話　模擬戦をやろう！（前書き）

そういえば前回言い忘れていたのですがキャラが誰なのかを分かりやすくするため七花の一人称を「俺」、燈籠の一人称を「オレ」とすることにしました。

それでは第四話です。

## 第四話　模擬戦をやろう！

仮初燈籠の修行風景

燈籠は城の地下にある修練場で修行をしていた。

「何からやろうかな？とりあえず、いろいろ試してみるか。」

いろいろやってみた。

「まさか王の財宝が使えるとは思わなかったぜ。他にもいろいろと出来たし。」

なんと、能力を使ってゲートオブバビロンが使えるようになったりした。

他には無限の剣製も使えたけどあんな長い詠唱が戦闘中に出来るとは思わなかったので却下にした。

魔法も使えるし、武器だって作れるようになった。その気になれば宝具も使えるようになった。

さて、次は魔獣みたいなのでも召喚して実践訓練でもしてみるか。

そんな感じで5年が過ぎた。

え？飛ばしすぎだって？それは作者に技量がないか（

「今なんかいけないことを聞いた気がするんだが。」

「何かいったかい、燈籠？」

オレ達４人は修行を終えてみんなで模擬戦をやることになった。

「それより組み合わせはどうするんだ？」

「私は七花さんと戦いたいのですが。」

「それじゃ、最初は七花対子荻、次にオレとなじみでやるか。」

「よっしゃ～！楽しみだぜ。」

みんながどれだけ強くなってるのかが楽しみだな。

「よし、はじめるぞ。七花、子荻、準備はいいか？」

「ああ。」

「大丈夫です。」

「それでは、試合開始っ！」

ついに七花対子荻の戦いが始まった。

七花は虚刀流を駆使して格闘戦にしようとしているみたいだが、子荻も負けてはいない。

七花の攻撃の当たるギリギリのところで避けている。

「さすが子荻ちゃん。たった3年しか修行をしていないのにもう異常を使いこなしているね。」

「子荻の異常ってなんなんだ？」

「子荻ちゃんの異常は異常でね。異常ってのは原則1人に1つなんだが彼女は1人で3つもの異常をつかいこなしているんだ。」

「へぇ～そりゃ凄い。」

「あんまり驚かないんだね。」

「むしろそのぐらい出来て当然だ。なんたってオレの従者なんだからな。」

「おっと、試合が動くよ。」

見てみるとさっきまで子荻が若干押されている感じがしたのに今は七花が押されているように見える。

「何がおきたんだ？」

「子荻ちゃんが2個目の異常をつかったようだ。異常を使って七花君の背後に回って攻撃を仕掛けたようだね。子荻ちゃんは僕との修行が終わった後、七花君に虚刀流を教わっていたしね。奥義とまではいかないまでも、ある程度の攻撃力は付いたと思うよ。」

すると、突然地震のようなゆれと砂煙が俺達を襲った。どうやら七花が何かしたようだ。

砂煙が晴れるとそこには倒れている子荻と立っている七花がいた。

「決着が付いたな。七花の勝ちか。」

「いてて、負けちゃいました。」

「いい勝負だったぜ。まさかあそこで背後に回られるとは思ってもいなかった。」

「それじゃ、俺達もやるか？」

「望むところだよ。一泡吹かせてやるよ。」

「七花、審判を頼めるか？」

「いいぜ。では、いざ尋常に勝負……始めっ！」

その合図との瞬間オレはなじみに向かい一直線に駆け抜けた。
しかしその場所になじみはおらずオレは急停止した。

「フフ、どこを見ているんだ。私はここにいるじゃないか。」

「どこだ！どこにいる！？」

オレは辺りを見回すが誰もいない。
こうなったら気配で探すしかない。

「そこか！」

オレは右斜め前に向けて蹴りを放った。

「女の子相手に蹴りをかますとは優しくないね。でもよく見破ったね、といいたいが僕のスキルはこれからが本番なんだよね。」

なじみがそういうとオレの周りに透明の壁が出てきて俺を包み込む。

「『有敵要塞(プラスチックシールド)』だよ。これで出来たものはどんなものでも破れたりはしない。」

オレは即座にこの壁を壊せる武器を作り出し壁を破壊した。

「こんなものか？なじみ。」

「さっきも言ったろう、これからが本番だって！」

俺の周りから火が出る。雷も落ちてきた。氷柱が雨のように降ってきた。仕舞いには竜巻まで出てきやがった。

だが、こんな程度オレにとっては障害にもなりやしない。

「ハッ！」

オレが軽く手を振り払えばそれらは全て消え去った。

続くように地面が崩れる。なじみが6人になってオレに攻撃を仕掛けてくる。無限の剣がオレを串刺しにしようとする。次元がゆがむ。空間が避ける。ありとあらゆる物がオレに襲い掛かる。

「フン。」

だがこれもオレは粉砕する。

そのスキになじみはオレに突撃してくる。

オレはなじみが攻撃してくると思いそれに対応するためになじみのほうを向く。

「やっと、ひっかっかってくれたね。燈籠。」

その瞬間オレの周りにに魔方陣が展開される。
そして足元の魔方陣からはヘビが、周りの魔方陣からはいくつもの鎖が、はるか上空からはなんと隕石が落ちてきた。
ヘビと鎖はオレを拘束し固定した。

「これで僕の勝ちだね、燈籠。」

「油断は禁物だぜ、なじみ。」

そしてオレは時間をとめた。

そのうちにオレは拘束を抜け出しなじみを隕石の真下まで移動させオレは安全な場所まで避難した。

「これでよし。時よ、動け。」

時間が動き出す。

「なにを言っているんだい？燈籠。どう考えても僕の勝ちって、何だこれは？どうして僕は拘束されているのかな？そしてなんで君は避難しているんだい？」

「ちょっとした奥の手さ。」

「くっそぉぉぉぉぉ！もう少しだったのに～」

なじみの捨て台詞と同時に隕石が着弾した。
オレの勝ちだな。

## 第四話　模擬戦をやろう！（後書き）

今回は戦闘描写を入れてみたんですがどうでしょうか。
こうしたほうがいい、などという意見がございましたら感想に書き込んでくれるとありがたいです。

# 第五話　そうだ魔法世界に行こう（前書き）

第五話です。

## 第五話　そうだ魔法世界に行こう

オレとなじみの模擬戦が終わった後、子荻と七花がオレが何をしたのか聞いて来た。

「燈籠さん、いったいどうやってあの状況から逃げ出せたんですか。」

「そうそう、気がついたら二人の位置が逆になっていたな。」

「僕も驚いたよ。勝てると思ったのに負けちゃったからね。」

復活したなじみも聞いて来た。

「教えてやろう。あれはな時間をとめたんだ。」

「「「時間をとめた！？」」」

驚いてるな、本当は使いたくなかったんだがな。

「そんなことまでできるんですか？」

「言っただろう。オレの能力は何でも出来るって。」

「時間をとめるなんてビックリ仰天大爆発だぜ。」

「勝てるわけないじゃないか。こんなの反則だ。」

なんにしてもこれでやることは全部終わったな。

これからどうするかな？
外の世界にでも行こうかな？
「みんな、修行も終わったことだし外の世界に行ってみないか？」
「それなら私は魔法世界にいってみたいです。」
「魔法世界？なんだそれ？」
魔法世界か、聞いた事がないな。
どんなところなんだ？
「魔法世界には私達とは違った獣人や妖精がいるそうです。」
「なんでそんなことを知ってるんだ？」
「暇だったのでこの世界について少し調べてました。」
「それで、その魔法世界とやらにはどうやっていくんだい？」
「それはオレの能力を使えばいいだろう。」
「俺達は魔法なんて使えないのに魔法世界にいってなにをするんだ？」
「それはその時に考えるさ。それと一応言っておくが俺は魔法が使えるぞ。」
「はぁ、あなたは本当に規格外ですね。」

3日後
「よーし、出発するぞ！」
「楽しみだなぁ～。俺も魔法がつかえたりするのかな？」
「それよりここの空間はどうするんだ？誰かに気づかれたりはしないのかい？」
「それなら問題ない。すでにこの空間は現実とは隔離されている。ここの場所が誰かにばれることもないし、オレ達がどこにいようがこの空間に入ることが出来る。」
「つまり私達なら自由にここに出入りが可能ということですか。便利ですね。」
そろそろ行くか。
「ハッ！」
手を一振りする。
次元が歪み町が見える。
「よし、これでいけるはずだ。」
「なんだか少し怖いね。」

「大丈夫だ。オレが守ってやるからな。」

（／／／照れるじゃないか／／／）

「よし、行くぞ！」

俺達は次元の歪みの中に入る。
すると目の前には多くの人と西洋風の町並みが広がっていた。

「ここが魔法世界か～、人が多いなぁ。」

「見たところ普通の人間もいるようですね。」

「少し町を見て回るか。」

どうやらこの街は国の首都らしい。だからこんなに人が多いのか。
いろいろ見て何か買おうと思ったけど、金を持っていないので能力で金を出していろんなものを見て回ったが、特にいいものがなかったので意味がなかった。金はしまっておくとしよう。

「たいして何もありませんね。」

「全く拍子抜けだよ。もっと面白いものがあると思ったのに。」

「おい！みんな、これを見てくれ。」

本屋にいる七花が指を指したのは『誰でも出来る魔法の使い方』という本だった。

「なあなあ、これ買ってくれよ！何か面白そうだ。」

魔法の使い方か。この世界の魔法がどんなのかは気になるな。金があるんだし使わないのももったいないし、買ってみるか。
オレはレジのような場所に行った。

「おい、ここにある魔法関係の本を全部くれ。金は払う。」

「全部ですか！？お金は「これだけあれば十分だろう」

オレはこの世界の通貨が分からないからとりあえず持ってる金を全部出した。

「なっ、こんなにも「早くしろ。その金は全部やる。」

また作ればいいだけだ。
金なんぞ持っていても邪魔なだけだ。

「ど、どうぞ。」

店員が何十冊もの本を持ってきた。
大体３０冊ぐらいか。
なじみたちのところに戻るか。

「お、戻ってきたね。ずいぶんと買ったみたいだけど。」

「あの店にあった魔法関係の本を全部買ってきた。」

「そこまでやる必要はなかったのでは。」

「よっしゃー。これで俺も魔法が使えるぜ。早速試してみようぜ。」

七花の提案によりオレたちはまた城に戻ってきた。
3時間で戻ってくるとは思いもしなかったぜ。

「えーと、まず最初に杖を用意します。」

杖はオレが最高級のものを4つ分作っておいた。
オレはやらんがな。他の魔法とかも使えるし覚える必要がない。

「それで、まずは初級呪文というやつか。
プラクテ　ビギ・ナル“火よ灯れ（アールデスカット）”と唱えて火がついたら成功だ。やってみろ。」

七花の場合

「プラクテ　ビギ・ナル“火よ灯れ（アールデスカット）”火なんかつかないが？」

「最初から出来る人はごく稀だそうだ。根気よく続けることが大切だって書いているぞ。」

「そうか。プラクテ　ビギ・ナル“火よ灯れ（アールデスカット）”」

そんな感じで何回もやっていたが一向に火はつかなかった。

子荻の場合

「プラクテ　ビギ・ナル“火よ灯れ（アールデスカット）”」

ボッ

お、今一瞬だけ火が出たように見えたが。

「おかしいですね。もう一度やってみますか。プラクテ　ビギ・ナル　“火よ灯れ（アールデスカット）”」

ボウッ！

今度はちゃんと火がついている。すごいな。さすがは策士って感じだな。

その後もどんどん魔法を成功させていって中級魔法の練習をしていた。

なじみの場合

「プラクテ　ビギ・ナル　“火よ灯れ（アールデスカット）”って、うわあぁぁぁぁぁ！」

なじみが呪文を唱えるとなんと最初から火がついた。しかし火が強すぎたため天井まで炎が燃え上がってしまった。なじみが驚いて杖を離したから大丈夫だったけど危険だったな。

なじみも魔法を使うことはあきらめたようだ。

みんなの様子を見たところ一番魔法を使えるのは子荻みたいだな。逆に1番出来なかったのは七花だな。1番魔法を使いたがってたのに残念だったな。

## 第五話　そうだ魔法世界に行こう（後書き）

あさってにテストがアルー
めんどくさい　勉強してない

ということで明日からはしばらく投稿できないかもしれません。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6920y/

魔法先生ネギま！　　転生者VS転生者

2011年11月23日14時48分発行